

ブラジルにおける日本哲学研究

Felipe Ferrari Gonçalves

はじめに

一九〇八年、七百八十一人の日本人移住者がブラジル・サン
トス港に入港した。日本人のブラジル移住の始まりであった。
それから百年後の二〇〇八年、日伯両政府は移民百周年を「日
本ブラジル交流年」（日伯交流年）として祝った。その年に、
サンパウロ日本文化センターとサンパウロ州立カンピナス大学
（UNICAMP）で「日本思想研究会大会」が行われたが、そ
れがブラジルにおける日本哲学の歴史の第一目であったわけ
ではない。研究会の主権者であったクロアチア生まれのブラジ
ル人 Željko Toparić（ジェリコ・ロパリヒ）は、一九九七年十
一月から一九九八年二月までの計四ヶ月間京都に滞在し、京都
学派とハイデガー哲学の関係について研究をした。その後、二
〇〇五年後半にロパリヒは、UNICAMP、教皇庁立カトリ

ック大学（PUC）、そしてブラジル現象学会（SBF）の八名
の研究者と共にウイニコット精神分析学会館（IBPW）で「日
本思想研究会」を創設した。この研究会は以下の三つの目的を
持っていた。日本文化の中心点を理解すること、西洋や東洋に
存在する根本的な問題を分析すること、そして、これら二つの
目的をブラジルの観点から考えることである。

一 ブラジルにおける日本哲学の研究大会

二〇〇六年に「西洋と東洋の出会い―京都学派の遺産」をテ
ーマとした、日本思想研究会の初の大会がサンパウロ市にある
IBPWで行われた。二〇〇七年に、「ニヒリズムと言語」を
テーマに「第二回日本思想学会大会」が同じ会場で行われたが、
次の大会から、UNICAMPがブラジルにおける日本哲学の
研究の中心地となった。二〇〇八年、「日本人ブラジル移住百

周年記念」のためブラジルと日本で様々な式典や行事が行われるなか、九月にIPBWとUNICAMPで「第三回日本思想学会大会」が開催されたのだが、その参加者は二年前と比較すると三倍以上に増え、日本人パネリスト（関西大学の井上克人氏と防衛大学の轟孝夫氏）も初めて学会に参加した。二〇一〇年にUNICAMPで開催された「第十五回ハイデガー哲学学会大会」のテーマは「ハイデガーと東洋思想」であり、John Maraldo（ジョン・マラルド）氏、Bernard Stevens（バーナル・ステイヴェンス）氏、Georg Stegner（ゲオルク・シュテングァー）氏や秋富克哉氏などが初めてブラジルで研究発表をした。二〇一三年に、ロパリヒの次に「日本思想研究会」の会長となったAntonio Florentino Neto（アントニオ・フロレンティノ・ネット）は学会の名称を「東洋思想学会」に変更をし、八月四日から十三日まで九日間をかけ、UNICAMP、サンパウロ連邦大学（UNIFESP）、ウベルランジア連邦大学（UFU）で、「仏教と哲学」をテーマとした国際大会を開催した。二〇一四年には、ドイツのヒルデスハイム大学でUNICAMP出身のLucas dos Reis Martins（ルーカス・ドス・ヘイス・マルチーンス）が日本、ドイツ、スペイン、イタリア等の研究者と共に「欧州日本哲学研究会」（ENOJP）を立ち上げ、二〇一五年にバルセロナで行われたENOJPの初の国際大会から現在まで毎回、ブラジル人研究者が学会に参加している。

二〇一五年九月に、「京都学派の東洋的起源」をテーマにし

た「第四回ブラジル東洋思想学会大会」が開かれ、フロレンティノ、Marcos Luiz Müller（マルコス・ルッツ・ミュラー）やOswaldo Giacóia Junior（オスヴァルド・ジアコーイア・ジュニオール）は、他の研究者と共に「全国哲学大学院会」（ANPOF）という、ブラジルだけでなく中南米においても最大の哲学学会に「東洋哲学部会」（GTORIENTAL）を登録した。GTORIENTALの議事録によると、研究会の標語は「ANPOFの哲学的な空間の中で、東洋で議論されている問題を取り扱い、西洋哲学界と東洋哲学界の対話を提供する」であり、十年前にIPBWで創設されたブラジル初の日本哲学会の影響を受け、「東洋文化に対するステレオタイプを排除して東洋哲学の伝統をデイスカッションし、東洋哲学の文献をポルトガル語に翻訳し、比較思想の立場から東洋と西洋の哲学界の研究を広めること」という目的を持っている。二〇一六年にジョアンペソア市で行われたANPOFの「第十七回全国哲学大会」においては、GTORIENTALには八名の教授が登録されていた。二〇一七年にはブラジルの東洋哲学会の第六回大会が開催され、発表者、パネリスト、全ブラジルの学部生、大学院生、教授を含め百名以上が大会に参加した。

二 書籍

ロパリヒは、二〇〇九年に編集者としてDWW社（SBPWに所属している出版社）からブラジル初の日本哲学の書籍

Escola de Quioto e o perigo da técnica『京都学派とテクネの危険』を出版した。二〇一二年は『善の研究』の出版百周年の年で、Estação Liberdade社は加藤周一の『日本文化における時間と空間』のポルトガル語訳 *Tempo e Espaço na Cultura Japonesa* を出版した。同年に、フロレンティノーはブラジルの学者が東洋哲学についてのエッセイとポルトガル語の翻訳版を出版するためにPHI出版社を設立した。翌年に、PHI社はUFU出版会と共にシアコーイアが編集した *Heidegger e o Pensamento Oriental* 『ハイテガーと東洋思想』という書籍を出版し、それ以降、フロレンティノーとシアコーイアは編集者としてPHI社から次の書籍を出版した。

二〇一三年：*O Nada absoluto e a superação do nihilismo*：Os *fundamentos da Escola de Kyoto* 『絶対無とニヒリズムの克服：京都学派の基礎』

二〇一四年：*Budismo e Filosofia em diálogo* 『仏教と哲学の対話』

二〇一六年：*Escritos de Leibniz sobre a China* 『ライブニッツは中国について何を書いたのか』

二〇一七年：*A Escola de Kyoto e suas fontes orientais* 『京都学派の東洋的起源』

また、二〇一六年に『善の研究』が *Ensaio acerca do bem* として Joaquim Antonio Bernardes Carneiro (ジョアキム・アントニオ・ベルナルデス・カルネイロ) によって翻訳され、PHI

I社は日本哲学で最も議論されている作品の初のポルトガル語訳を出版した。同年に、Giuseppe Ferraro (ジユゼッペ・フェラーロ) はPHI社からインド仏教の僧の龍樹 (Nagarjuna) の『中論』 (*Versos Fundamentais do Caminho do Meio*) の翻訳を出版した。

三 ブラジルにおける

日本哲学の研究の現在と未来

現在、ブラジルにおける日本哲学の研究は日本人哲学者の思想だけではなく、日本哲学が受けた中国やインドの影響や日本哲学の国際性に注目している。二〇一八年にUNICAMPで開催された「第七回東洋思想学会大会」のテーマは、「中国における伝統と現代」であり、二〇一九年の会テーマは「自然の中の反自然主義と異文化性」であった。その他にも、二〇一九年、前年にブラジルで創設された「中南米異文化哲学会」(ALAFI)の初の国際大会がサンパウロ州立大学(USP)で行われる。二〇二〇年にはUNICAMPで東洋思想学会の第八回大会が開催される予定であり、同年の十月にANPOFの「第十八回全国哲学大会」がヴァイトーリア市で行われる予定である。現在、ANPOFのGTORIENTAL部会には二十六人の研究者が登録され、毎年UNICAMPで行われる「東洋思想学会」の大会の参加者の人数は毎回百人を超えている。

nas: Editora PHI, 2016 (翻訳: Giuseppe Ferraro).

(フェリペ・フェハリー・ゴンサルベス、比較哲学、
四日市大学准教授)

日本人のブラジル移住が始まってから百十年が過ぎ、ロバリヒが京都大学に滞在してから二十年が経って、現在はブラジルの哲学界における多くの学者、学生や愛好家から、日本哲学は欧州の哲学的伝統と同じように見られ尊敬されていると考えられる。日本の反対側にある熱帯国ブラジルにおいても、日本哲学の明るい未来を見ることができようであろう。

参考文献

- Zeijko Loparic (Org.), *A Escola de Quieto e o perigo da técnica* (京都学派の
ネットの危険), São Paulo: DWW Editorial, 2009.
Shuichi Kato (加藤周一), *Tempo e Espaço na Cultura Japonesa* (日本文化に
与ける時間と空間), São Paulo: Estação Liberdade, 2011 (翻訳: Neide
Nague & Fernando Chamas).
Antônio Florentino Neto & Oswaldo Giacóia Junior (Org.), *Heidegger e o
Pensamento Oriental* (ヘーゲルと西洋思想), Uberlândia: EDUFU, 2012.
Antônio Florentino Neto & Oswaldo Giacóia Junior (Org.), *O Nada absoluto
e a superação do nihilismo: Os fundamentos da Escola de Kyoto* (絶対無と
クリスムの克服: 京都学派の基礎), Campinas: Editora PHI, 2013.
Antônio Florentino Neto & Oswaldo Giacóia Junior (Org.), *Budismo e Fi-
losofia em diálogo* (仏教と哲学の対話), Campinas: Editora PHI, 2014.
Antônio Florentino Neto (Org.), *Escritos de Leibniz sobre a China* (ライプニツ
ヒツと中国のついでに書かれたもの), Campinas: Editora PHI, 2016.
Antônio Florentino Neto & Oswaldo Giacóia Junior (Org.), *A Escola de Kyo-
to e suas fontes orientais* (京都学派の東洋的起源), Campinas: Editora
PHI, 2017.
Kitaro Nishida (西田幾多郎), *Ensaio sobre o bem* (善の研究), Campinas:
Editora PHI, 2016 (翻訳: Joaquim Antonio Bernardes Carneiro).
Nāgārjuna (龍樹), *Versos Fundamentais do Caminho do Meio* (中論), Campi-